を理解し、まず心をほぐす 男女、悩みは全く個々別々

日遊協は遊技産業のなかで「依存対策」に積極的に取み、啓発活動を強化しており、庄司孝輝会長は新たに組織内に「依存対策プロジェクトチーム」の立ち上げも検討している。本誌は３月号で、久里浜医療センターの河本泰信医長のインタビューを掲載したが、今号は電話相談の現場からのリポートとして、リカバリーサポート・ネットワーク（ＲＳＮ）の西村代表理事の講演をお届けする。これは、ＲＳＮ主催で２月12日に開かれたセミナーの「電話相談から見えるパチンコ・パチスロ依存の現状」で話された内容の要旨である。

リカバリーサポート・ネットワーク　西村直之代表理事

パチンコだからこそ生きてくる電話相談

リカバリーサポート・ネットワークは、日本で唯一のパチンコ・パチスロ依存問題を専門とする電話サービス機関です。２００６年に電話相談を開始し、これまで１万２０００件の相談に対応してきました。月の相談件数は２００～３００件で、相談料は無料です。

電話相談を継続していて、とりわけ重要だと思うのは、患者さんからのＳＯＳです。私はもともと薬物依存からの回復支援の仕事をしておりました。薬物依存の場合、患者自身が犯罪者として扱われますから、重症化して助けを求めようにも、そういう場所がない。助けを求めることは、警察に捕まることを意味しますから、相談なんてとてもできない。

そうしたシステムが出来上がってしまっていますから、相当重症な患者さんからもＳＯＳの声を聞くことができず、中には悲劇的なケースに至ることもままあるわけです。ところが、パチンコ・パチスロの場合は、そうではありません。パチンコをするだけなら、別に法に触れるわけではない。そうであれば、自ら助けを求めることができるのではないか。そういう発想の転換から、電話相談を始めました。

Ａ４ポスターが武器に大きい21世紀会の支援

電話相談開設に当たっては、全日遊連パチンコ・パチスロ依存問題研究会やホール経営者有志の方などのご協力で、各ホールにポスターを貼り、電話相談を受け付けるという方法をとりました。電話相談という性格から、相談者の８割が当事者本人からの相談です。この点では、きわめて特異な相談機関といえます。

運営に当たっては、パチンコ・パチスロ21世紀会など14団体からの支援、寄付、会費をいただいています。２０１３年12月、沖縄県認定の第１号認定ＮＰＯ法人として承認されました。

私たちの最重要なツールは、このＡ４サイズのポスター（37ページ）です。この大きさには意味があります。ホールのトイレに貼っていただくように、このサイズにしました。依存症の可能性が高い、い

若手相談者

わゆるヘビーユーザーの方は長時間ホールにいますから、必ずトイレには行きます。その時に、目にしてもらうように、というわけです。

ポスターは年間14万枚刷っています。全日遊連の機関誌「遊報」に同封してもらうほか、私たちのホームページからダウンロードしたり、最近ではパチンコ・パチスロの攻略雑誌にも定期的に載せてもらうようになりました。できるだけ多くの人の目に触れるように努力しています。

相談は2012年が2000件でしたが、2013年になると3000件と、急激に増えています。遊技業界のみなさんが本格的に取り組んでいただいた、つまりポスターをいろいろな所に貼っていただいたおかげだと思います。事務所は、沖縄県那覇市西原町にあります。スタッフは常勤2名、非常勤2名の4名が働いていますが、おかげさまで、てんてこ舞いの毎日です。

A4サイズのポスター

「こうしなさい」など言わないようにして

どのような人が、電話をかけてくるのでしょうか。私たちは、相談者に、こうしなさいとか、こうしたらやめられます、というような話は、決してしません。なぜなら、それに反発して、逆にムキになってもっとやってしまうかもしれないからです。

西村直之代表理事

電話をかけてきたことで、とりあえずプレーをいったんストップすることができます。電話をかけてきたことを評価されることによって、幾分か罪悪感から逃れることもできます。電話をかけてくることで、「おれは一体何をやってるんだろう」と考える時間を持つこともできます。

相談者からは、いろいろな質問が出ますが、一番多いのが、「やめようと思ってもつい行ってしまう…私は依存症ですか？」というものです。こういう相談者に、「はい、あなたは依存症です」と言っても始まりません。「はいそうですか」で終わってしまったら何の解決にもつながりませんからね。「自分は依存症ですか？」という質問は実はナンセンスなのです。相談者に対していきなりナンセンスとは言いませんが、まずは相談者が困っている状況がどんなものか、聞くことから始めます。

例え金額が低くても追い込まれる若い人

40代の男性です。パチスロを始めて2年。週に1～2回、パチスロに行く。遊技料金は月約3万円。ただ、40代でそれなりの収入があります。「私は依存症でしょうか」というわけです。これだったら、むろん何の問題もありません。

ところが、これが20代男性の場合は問題です。遊技料金は同じく月3万円程度ですが、アルバイト暮らしで、そのアルバイト収入を全部注ぎ込んでしまいます。親に嘘をついてお金をもらうこともあります。そんな自分を依存症ではないかという不安を感じている、と言います。

可処分所得の低い若年層の場合、金額は低くても、それによって、さまざまな社会的問題を引き起こす場合があります。なんで自分はこんなことしてるんだろう、という激しい自責の念から、自分でパチスロから離れて行ってしまうこともありますが、激しい葛藤に押

しつぶされ、わけがわからなくなって、さらに突っ込んでいってしまうこともあります。

こういう相談者には、「何のためにパチスロに行くんですか」と問うことから始めます。初めは楽しかったのに、今はなぜ楽しくないのか。罪悪感に駆られてしまうからです。そんなに嫌だったら、行かなくてもいい方法を考えてみませんか、と誘いかけます。そして、依存状態から抜け出た方の体験を書いた本などを読むことを勧めます。この程度のことで、立ち直るケースもままあるのです。

家庭のストレス原因 罪悪感を抱えて通う

子どもを幼稚園に送った後、ついパチンコに行ってしまう、という28歳の主婦です。パチンコを始めて1年。週3～4回で、月に2万円くらい使ってしまう。金額からいうと、大したことではないかも知れません。

ホール経営者の皆さんから見ると、この程度で依存症云々といわれてはかなわない、と思われるかもしれません。理由を聞いてみると、子どもを幼稚園に送った後、まっすぐ家に帰るのがいやなのだと言います。姑との関係や子育ての疲れから逃れたいというのが動機です。

この相談者は、パチンコのための借金はないのですが、生活費を使いこんでしまうことに罪悪を感じています。本来、楽しい娯楽なのに罪悪感を抱えてホールに通う、これが問題なのです。家庭を持った女性の場合、パチンコが家庭の大きな問題になりやすいという特徴もあります。

一つの対処法として「毎朝でも電話して」

こういう人にも、いきなりやめようということは、言えません。家の中での逃げ場のなさから逃れるためにパチンコをし、さらに罪悪感に陥ってしまう、こじれて余計にストレスを感じています。だとするならば、ストレスに対する対処法として、パチンコではない、他の方法を見つけてみませんか、というのが、私たちの回答です。

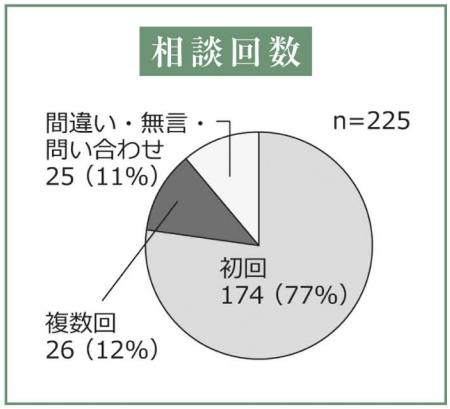
世の中には、パチンコでなくとも、キッチンドリンカーになってしまう人や、通販にのめり込んでしまう人、はたまた出会い系サイトにはまりこんでしまう人もいます。みんなストレスに対する対処法では、いろいろ悩み苦しんでいます。とにかく毎朝でもいいから、この電話相談に電話してきてください、という話をしました。

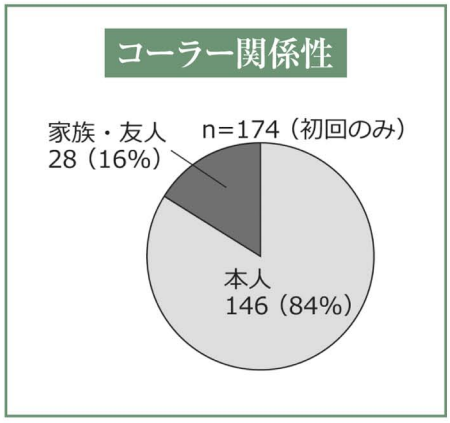
その中で、いろいろな子育て支援や、発達障害の子供や知的障害の子供を抱えていたら、それにあう社会的資源をピックアップして伝えていきます。この相談者の場合は、その後数回電話があり、今は連絡が途切れているそうですが、話の内容から、おそらく自分を取り戻し、パチンコに依存する状態から抜け出ていってくれたのではないでしょうか。

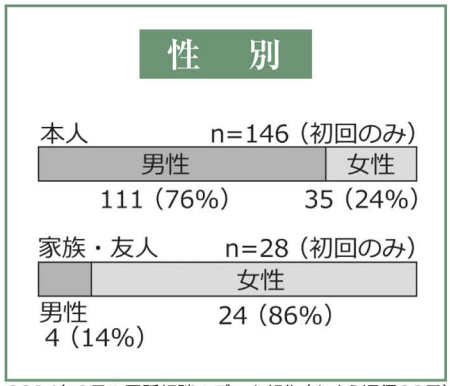
「60万円貸してくれ」遠くに住む母が心配

83歳の母親が、年金をすべてパチンコに使ってしまうので心配です、という57歳の主婦の方からの相談がありました。1人暮らしの高齢者が、依存に陥るということは、よくあります。北海道に住んでいるのですが、娘さんは九州にいて、おいそれと会いに行くこともできずにいたところ、突然「60万円貸してくれ」と電話で言ってきて、娘さんを困惑させています。

8年前、夫と死別してから一人暮らしで、孤独と不安の中から、パチンコにはまりこんだそうです。少し認知症も始まっているようで







2014年2月の電話相談のデータ報告（さくら通信83号）

した。とりあえず、母親の住む地区の保健婦さんに連絡を取り、親戚や兄弟とも連絡を取って、あまり感情的にならず、落ち着いて対応するように勧めました。

その後、この母親が、依存から抜けたかどうかはわかりませんが、少なくとも娘さんの方の精神的混乱はおさまりました。団塊の世代もあと10年、20年すると、このような時期を迎えます。お爺ちゃん、お婆ちゃんにとっても、娯楽は本来、楽しく健康的なものでなくてはならないと思います。

孤独感を理解できる年配の相談員を採用

67歳の女性です。夫はすでに他界して、今は年金暮らしです。子供も結婚し、他県で暮らしています。パチンコは10年くらい前に始めました。最初はビギナーズラックで大勝ちしたのに味をしめ、パチンコが好きになりました。最近までは何の問題もなく過ぎていました。

ところが、1年ほど前から、急激にお金を使うようになり、生活費にも手を出すようになります。年齢からくる強い孤独感を感じるようになり、家に一人でいることが、辛くてならないと言います。年金もすぐ底をつき、本来なら孫に何かを買ってやらなくては、と思うと、罪悪感に駆られるとも言います。

孤独感と罪悪感にさいなまれ、相談の電話をかけてきたのです。こういうケースの場合、下手をすると、自殺のリスクもかなり高まります。私たちの相談員は、せいぜい50代ですから、高齢者から見ると息子の世代。ですから、なかなかわかってあげられないところもあります。

そこで、最近、ある60代の女性にお願いして、相談員になってもらいました。年齢の近い者同士でしみじみとした話ができて、少なくとも、罪悪感のレベルを和らげ、最悪のリスクを下げることには成功しています。

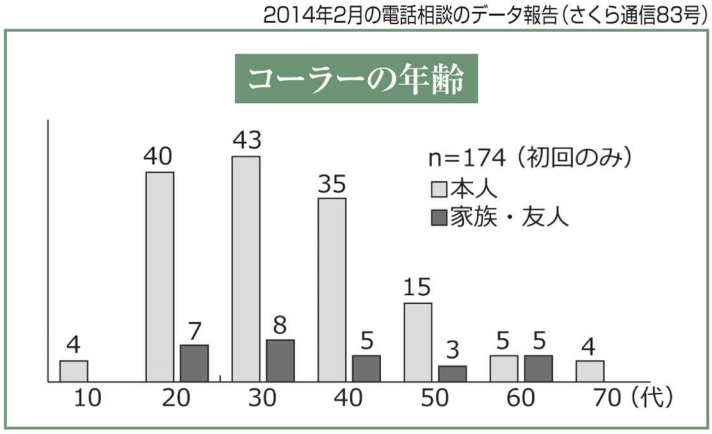
勝てないと知りつつ通ってしまう不安が

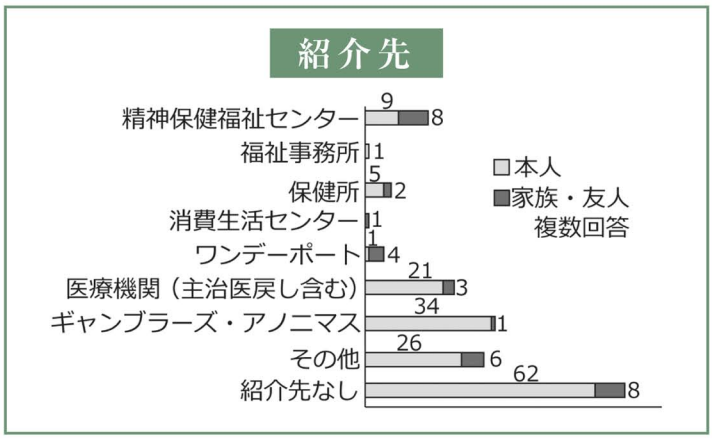
56歳の農業の方です。2年前、リストラで失職、実家が農業だったものですから、再就職が決まるまでの間、農業の手伝いをして暮らしていました。ただ、再就職は簡単ではありません。その憂さ晴らしから、パチンコに依存するようになり、貯金にも手をつけてしまいました。借金はないものの、文無しの状態に陥ってしまいました。

この人の場合、パチンコでは所詮、永久に勝つことはできないということはよくわかっていると言います。しかし、負けて2～3日もすると、またパチンコに行ってしまう。勝てないとわかっているのに、すぐ気が変わり、行ってしまう。自分でも何が何だか分からない。思考が混乱して、筋道立てて、物事を考えることができないようです。

実は、パチンコ依存にはこのタイプが多いんですね。こういうタイプが、リストラなどで気持ちが不

2014年2月の電話相談のデータ報告（さくら通信83号）





経　路

	本人	家族・友人	合計
ホール内ポスター	84	7	91
インターネット	39	16	55
雑　誌	4	0	4
他の相談機関	0	1	1
その他	11	4	15
不明・拒否	8	0	8
総計	146	28	174

安定になる時に、たまたまパチンコで勝ったりすると、我を忘れてしまいます。下は20代から50代まで、急にバタバタと悪くなります。

もともと、不安要因を抱えていた人が、リストラなどの社会病理に直面し、パチンコに通うことで、表面化してしまうのです。この人の場合は、1回パチンコから離れたほうがいいということで、パチンコをやめようとしている当事者たちの集まりを紹介しました。軽いウツの症状もありましたので、精神科も紹介しました。

まじめな性格なのに歯車が狂ってしまい

21歳のホール従業員です。両親が幼いころに離婚。高校中退でアルバイトを始めます。20歳のころ友人に誘われてパチスロを始めました。学費の貯金と家計を助けるため、自給のいいホールでアルバイトを始めました。大変マジメな青年です。

ところが、毎日大勝しているお客さんを目にしているうちに、自分も勝てるのではないかと思い、徐々にパチスロにはまりこんでいったといいます。相談の電話をかけてきたころは、やめなければとは思うが、給料が入ると、これまでの負けを取り戻したくなり、またやってしまう。友人からの借金も重なり、生活も苦しくなる一方、ということでした。

毎回同じことの繰り返しで、このままでは一歩も前に進めない。彼なりの危機感から、トイレでポスターを見て、電話してきたということです。社会的経験の少ない若い人の場合、ひとつ歯車が狂うとこういうことになります。

この方の場合、小さいころに両親が離婚して、何でも一人でやらなくてはならないと、思い込んでいたようです。その点では懸命に生きてきたわけで、それだけの気持ちがあれば、必ず今の苦境から抜け出し、前向きな人生を歩むことができる、というような説得を行い、当事者グループへの参加を勧めました。

ホールの管理者も仕事の重圧に負け

37歳のホールの管理者の方です。パチンコは高校生の時、友達に勧められて始めました。32歳の時、借金が重なり、一度債務整理をしました。ところが34歳の時、あるホールのオーナーに勧められ、ホールに転職しました。

結婚し子供もできて、3年間くらいは安定した生活を営みましたが、その後、仕事からのプレッシャー、ストレスを感じ、休日、他のパチンコ店でパチンコを打つようになり、再び、やめられない状態になりました。将来のことを考えるとやめた方がいいのはわかっているが、自分一人ではやめられない、と訴えます。

このような方が、このまま仕事を続けているのは危険です。家族歴の中にアルコール依存もありそうで、もともとひとつの歯車が狂うと、そのままズズッと行ってしまうタイプのようです。どうも一般的な相談では解決が難しいということで、個別の相談に切り替えたうえで、そのような専門機関に紹介しました。

相談員も困り果てた息子を苦しめる母親

頻繁にパチンコに行く母親に困り果てた17歳の高校生からの相談です。あまりの悲惨さに、事務所の相談員全員がへこんでしまったそうです。この子は物心ついたときは、母親に連れられてホールに出入りしていたそうです。両親のけんかが絶えず、この子が中学生の時、ついに離婚してしまいました。

以後、パートで働く母親と弟の3人暮らしです。学校が終わって家に帰ると、母親の姿はなく、たいていはパチンコ店に。やがて母親は生活費もパチンコに使いこみ、家賃や公共料金を滞納、弟の奨学金まで使い込んだといいます。

相談者はアルバイトで必死に稼いでいたようですが、未成年者のため給料振込の銀行口座を母親に抑えられ、勝手にお金を引き出されてしまいました。それでも母親は聞き入れてくれない。高校を卒業したら就職先も決まっているが、弟を一人残していくこともできず、実家から離れることはできません。昭和30年代の話ではない、つい最近の話です。

このケース、さまざまな専門的な支援が必要で、どのように対処したかの具体的な報告は控えさせていただきますが、要は、大人たちの一時的な娯楽の結果、若い人の未来まで奪ってしまっていいのか、ということではないかと思い

ます。

子供たちの不登校問題やリストカットなどの問題を掘り下げていくと、実はこうした問題が浮き上がってくるという場合がままあります。パチンコ産業の足元、その周辺でこういう問題が起きているということを、ここにお集まりのみなさんにはぜひ知っておいてもらいたいと思います。

理不尽な文句を言う困った人も多くいて

このような相談のほかに、相談電話には様々な苦情も寄せられます。例えば、「すぐにやめられる方法があるのなら教えろ」という要求。「そんなものありません」というと、激怒して、1時間くらい文句を言うというようなケース。

「ポスターにある〝適度に遊ぶ〟、とはなんだ。そんなものあるはずないだろう！」というのもあります。世の中に適度に遊んでいる人はたくさんいます。適度に遊んでない人がこういうことを言ってくるんですね。「お前らこそ業界とつながっているんだろう。この偽善者！」という人には、確かに業界の支援や寄付で運営しています、と正直に答えることにしています。

「さんざんお金を使わしておいてこのポスターはなんだ。こんなもの貼るくらいなら、ホールをなくせ」「依存している人がいるから経営が成り立っているのじゃないか」というのもあります。

「取り組みに感心した」「業界の見方変わった」

好意的な反応もむろんあります。

「どのホールに行っても貼ってあるので、信頼できる機関だと思って電話した」「ホールも思い切ったことをしますね。業界の見方が変わった」というのもあります。今では大体8割のホールにポスターが掲示されています。「パチンコ問題を相談できる機関があること自体知らなかったので助かった」という声もあります。〝助かった〟という相談者の気持ちが大切だと思います。

「業界全体で取り組んでいるのがいい。続けてください」という声もあります。業界全体というのが重要だと思います。相談者の信頼のもとになっているようです。

「啓発ポスターをホール従業員から教えてもらい、電話した。取り組みに感心した」という電話もありました。ホールの側からの、こういう声かけも重要です。

「ポスターにあるチェック項目に当てはまることが多かったので相談した」「他人にパチンコがやめられない、なんてとても相談できない。誰にも知られず相談できるというので安心した。トイレでこっそり携帯に登録し、電話した」というのもありました。私たちのポスターが、大きな力を発揮していることがわかります。

RSN理事会での西村代表理事（中央奥）

依存の背景に3要因「商業的」絡むと厄介

パチンコ依存の背景について考えると、大きく〈商業的な要因〉〈環境的な要因〉〈個人的な要因〉の3つがあると思います。ただ、環境的な要因や個人的な要因というのは、いつの世の中でもあるものですが、これらに商業的な要因が絡むと、問題をこじらせてしまいがちです。こうしたところから、企業の社会的責任というのも生じてくるのだと思います。

娯楽には必ず依存があります。楽しくなければだれも付いていきません。おいしくないご飯を、だれが食べますか。そのため、できるだけリスクを少なくする、あるいは、問題が起こってしまった場合の対処法を用意しておくことが重要です。そうしたことを整備したうえで初めて、社会の中で、このくらいのリスクはあってもいいよね、という「娯楽のコンセンサス」が生まれるのではないかと思います。